

ある出会い

大村伸一

貫木三郎はマスターベーションが好きだった。一日に少なくとも七回はした。起きてすぐに一回、それから夜眠るまで時間があると人に見られない場所に行って、心ゆくまでマスターベーションを楽しんだ。一度のマスターベーションには十分以上の時間をかけ、今会ったばかりの女性を淫らに変身させてまぐわった。

毎回、大量の精液を放出したので、彼がした後、彼の身体からは精液のにおいがたちのぼり、周囲に人間がいると決まって彼らは怪訝な顔をする。だが、三郎はそんなことは気にならなかった。それよりも、次のマスターベーションにどんないやらしいことを考えようかと、それだけが気がかりだった。

射精は気持ちが良かったが、それがないと満足できないわけでもなかった。二十歳を過ぎた頃からは、射精ができずに欲望が満たされない状態であることも、なかなかいいと思うようになっていた。次のマスターベーションの時の快楽が、幾倍にも大きくなると感じられたからだ。

子供の頃、マスターベーションを覚えて一年くらいは、一日に何度もすると、男性器を包む表皮に痛みを感じて続けられなくなったのだが、やがて何度やっても苦痛にならなくなった。おそらく、諦めずに続けることで表皮が分厚くなったのだろうし、痛まないこすり方を覚えたのだろう。それよりも、その痛みさえ快感に変わったのかもしれない。

三十歳を過ぎる頃には、自分の性器に触らずに想像だけでも快感を得ることができるようになった。腰をくねらせて服にこすりつけたりなどはせず(最初はそんなやりかたもしたが)、想像の中だけで一連の行為を行い、射精にまで達することができた。だからその頃には、三郎が望めば、いつでもどこでも快楽に没頭できたのだった。

初めて触れずに射精までいったとき、自分の欲望の強さと快楽の可能性について驚き興奮した。そしてそのあと、裸になった自分の下半身を見て納得したのだが、そこには生まれたときから付いていた男性器の他に、七本の真新しい性器があった。親鳥から餌をもらおうと大きく口を開けてねだっている雛のように、刺激を求めて硬く勃起し空中にせり出す性器は若々しく、少し触れても弾けてしまいそうだった。

「これもマスターベーションに精進した賜物だろうか」

三郎は新しい快楽の機械に目を細め、そうひとりごちた。八本の性器は、彼の見る前で空間から快楽を吸い取るのだというように蠢き、彼の手が触れなくても、快楽を生み出しつづけた。

愛星吸子は、一目見て恋に落ちていた。三郎から目をそらせなくなり、姿を見失うと見つかるまで彼の姿を探さずにはいられなかった。パーティー会場は広かったので、目立たないように気をつけながら、あまり近づかないように気をつけながら、吸子は三郎のあとについてまわった。それまで付き合った男には一度も感じたことのない感情だった。他のことは考えられなくなり、一緒に来た友達との会話もちぐはぐになる。彼が化粧室に入ると、ドアが見える辺りから離れられない。彼が出ると、入れ替わりに化粧室に入って彼のにおいを胸いっぱい吸い込んだ。それでも早々に個室を出て、また彼の姿を追う。彼の気を惹くにはどうすればいいのかと、自問しながら気づかれないように、彼の横顔を見つめた。時折浮かべる彼の遠くを見つめるような表情。それを見るたびに、吸子の身体が溶けて足を伝って流れ出すように感じた。確かめると、彼女の下着は溶け出したものでぐっしょり濡れ、膝の辺りまでそれが垂れていた。コトハキュウヲヨウスル。彼女はそう思った。

三郎の周囲に誰もいなくなった瞬間を逃さず、吸子は三郎に近づいた。訝しそうに彼女を見つめる三郎の視線が、吸子には身体中が震えるほどに好ましく思えた。気を惹く方法など考える余裕はなかった。付き合っただけで欲しいと、精一杯セクシーに見えるように囁いた。本能が正しい行動を選んだのだろう、三郎は吸子の言葉に驚きはしたが拒まなかった。すぐに彼女の手を引いて化粧室のドアをくぐった。そんなに強く自分が求められているのだと感じ、今すぐ、何をされても幸せだと吸子は思った。個室に入ると鍵をかけるのももどかしく、二人は抱き合い舌を擦り付け口を吸いあった。競うようにお互いの服を剥ぎ取り、裸になった。そして、吸子は相手の腰に手を伸ばす。求めているものがそこにあった。でも。それは一つではない。吸子は確かめるために、目を落とす。個室のはっきりとした灯りの中で、彼の腰にある八つの性器がはっきりと見えた。それは彼女を求めて揃って頭をもたげていた。

吸子が泣き出したので、三郎はどうしたのかと尋ねる。吸子はうれしいのと答える。

「あなたは運命の人」

そう言って彼の目にさらした彼女の腰には八つの裂け目があった。